

研究委員会企画シンポジウム 2

21世紀の学びを考える

— 学力低下論を超えて —

企画者	森 敏昭 (広島大学)
	三宮 真智子 (鳴門教育大学)
	出口 毅 (山形大学)
司会者	三宮 真智子 (鳴門教育大学)
話題提供者	門脇 厚司 (筑波大学)
	田中 博之 (大阪教育大学)
	金井 義明 (熊本市立西原小学校)
	市川 伸一 (東京大学)

企画の趣旨

森 敏昭

研究委員会は、学会員の研究を活性化する目的で毎年シンポジウムを開催している。今年の本学会の前身である日本教育心理学協会の設立からちょうど50周年の節目の年に当たる。また、新しい21世紀になり、気分を一新して教育心理学会をさらに発展させていきたいというねらいがあり、その節目のシンポジウムにしたい。本学会は、この50年間に7,000人を擁する大きな学会になったが、今、試練の時、節目の時という認識に立ち、本シンポジウムの開催に当たり、2つの目的を考えた。

まず、第1に「前向きな元気の出るシンポジウム」にしようということである。そのために本学会で一番元気のある市川伸一理事長に登壇を願った。21世紀の扉が開かれた今、日本の教育は日本経済と同様に、出口の見えない閉塞状況の中で、ますます混迷の色を深めているように思える。そのような中で本学会の会員が今なすべきことは、アカデミズムの世界に閉じ籠もることではなく、現実社会に向けてメッセージを発信することではないだろうか。そして、そのメッセージが時代の閉塞状況を打ち破る力となるためには、社会の現実とのきわどい緊張関係の中で、情熱を燃やし、感性を研ぎ澄まし、理論を鍛え直し、言葉を磨き上げることが不可欠になるであろう。

第2に、「開かれたシンポジウム」にしようということである。そのために本シンポジウムは公開シンポジウムという形をとった。公開にしたことのもう1つの趣旨は、本学会以外の教育に関わる隣接の領域から教育社会学、教育工学・教育方法学、教育実践の現場でご活躍中の諸先生を話題提供者としてお招きし、会場にご参加の皆さまを交えて学力低下論争を手がかりに「21世紀の学びのあるべき姿」について建設的で前向きな議論をするため

の「開かれた議論の場」を設定することである。あえて指定討論者を立てていないことも、話題提供者を中心とした活発な議論を期待したからである。

本シンポジウムが、これからの教育現場にとって実りある議論となり、そして本学会のさらなる発展のための一契機となれば幸いである。

学力から社会力へ

門脇 厚司

教育に関心を持つ社会学者として学力問題に広い視野からいくつかの問題を提起したい。この問題をどういう方向で解決していくかについては教育社会学と教育心理学を専門にしている者には相当に重なるものがあるのではないかと、その意味で共闘していけるのではないかと考えている。市川伸一先生の著書『学力低下論争』(ちくま新書, 2002) 中にある学力論争に絡んでいる人脈図(p.16)に当てはめた場合、市川先生のポジションに極めて近いと感じている。本シンポジウムで主張したいことは、次の2つである。

1つ目は、「見える学力、見えない学力」についてである。これまで主張してきた「社会力」は、どちらかと言えば「見えない学力」に入る。「社会力か、学力か」というテーマは社会力を学力と対比したものになっているが、ここで述べたいことは「社会力を高めれば、その結果、学力を高めることに直接つながる」ということである。その主張には2つの根拠がある。まず、「社会力」は「社会に積極的に関わっていく力で、社会をよきまなものにつくりかえていく資質・能力」である。そのベースには他者への関心・愛着・信頼感といった問題がある。この考えを20項目5段階評価の質問に起こして調査を実施したところ、社会力スケールで高いグループが明らかに学力も高いという結果を得た。次に、その結果の解釈に関わる理論的根拠は、脳科学者の研究成果に基づいている。その成果は、良い環境をつくり社会生活を滞りなく送れるということが、大きな脳と高度な機能を持つ脳をつくり上げてきたということである。これは、社会力を高めることが脳の機能を高めることにつながるし、高められた脳の機能は学力を付けることに直接結びつくと考えられる。

2つ目は、学力や学習意欲に及ぼす階層の影響、すなわち「教育社会学における階層格差問題」についてであ